

治療の目的で使用するのには、バセドウ病と甲状腺癌の一部である。バセドウ病の放射性ヨウ素治療はわれわれの病院では昭和31年より行なっているが、長初の5年間には年平均38.8人、次の5年間は96.6人、最近の4年間は平均196.5人と急激に増加している。核種は $^{131}\text{I}$ であり、長近英国で試みられている $^{125}\text{I}$ による治療の経験はない。甲状腺癌に対しては、肺または骨転移があり、しかもそれが放射性ヨウ素を摂取する場合にのみ使用している。

RIの購入についていえば、検査件数、治療数共に10年前と比較すると飛躍的に増加しているにもかかわらず、 $\text{Na}^{131}\text{I}$ の購入量はほとんど変わっていないが、むしろ減少している。

\*

## 9. 当病院におけるシンチカメラについて

山田光雄 島崎 昭 大谷文茂  
(岐阜市 山田病院)

私達のような小さな個人病院が何故シンチカメラを導入したか、そして現在いかに働いているか、将来はどのように利用して行く心算であるかの点について申し述べたい。

第一の何故シンチカメラを導入したかについては、昨年、大阪労災病院の河田博士が、われわれの主催している岐阜県肝胆道研究会第1回の特別講演に来岐され、そ

の際肝シンチカメラについて話され、彼とは20年来の知人で、シンチスキャナーでもよいから導入してはとの奨めもあり、一昨年渡米した折、米国の小さな病院でもスキャナーが普及しているのを見てきたこともあり、また昭和25年頃から32年頃迄、鉄、クローム、ヨード等のアイソトープを使用して動物実験を行なった経験もあり、甲状腺のシンチについては教室で行なわれているのを見学したこともあって、案外思い切って導入にふみきました。初めニュークリアシカゴの物をという話もありましたが、レントゲンテレビを東芝のを入れている関係もあり、東芝製のを導入しました。私の病院は肝疾患が割合として多く、また私は従来この問題を専攻してきましたので、従来の血液による肝疾患診断の欠を補い、肝生検、腹腔鏡、胆管造影法等の患者負担を来たす方法に変わるスクリーニングテストとして用いられる方法として行っており目下肝シンチグラムに限定していますが、昨年10月4日から12月31日迄300例を行なっています。文献にあるごとく肝臓癌には非常に有用であります。肝硬変、肝炎の経過をみる上にも有用と思っています。将来は臍にも行ないたいと思っています。また金コロイドに変わるもっと半減期の短い物質も用いたいと思っています。最後に経済的にペイするか否かは目下の処不明ですが、より正しい診断がつくことにより充分ペイできるし、何れ経済的にもペイすると思っています。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*